

出かけて
みました

異国の丘・湖へ モンゴル・ロシア訪問記

ウランバートル・イルクーツク・ウラジオストク訪問団9名

は7月30日に成田を出発、8月3日イルクーツクに入り5日ハバロフスク、ウラジオストクを経て、7日に成田に帰着した。



モンゴル編 村瀬 廣（会員）

1、植樹先の学校へ

日本の公的資金を受けて、当協会は3つの学校で植樹を行っている。それらの学校を訪問し、校長先生などの出迎えを受け交流ができた。気候条件により樹木活着率はやはりやや低かった。

2、外務省など、旧知再会

駐日大使館公使としての善隣での講演から半年ぶりに、モンゴル外務省で面会したサラントゴス政策局長は、「たった今終えた会議で、アジア中東アフリカ局次長任命が決まりました」と、日本も対象とする担当になった



第122学校

3部制授業が普通という。我が国は54校もの校舎を、無償援助ODAで建設したが、うち3つの学校への植樹である。誇らしい話である。

たことを喜んでおられた。いずれは初の女性日本大使という呼び声を耳にする方である。



外務省サラントゴス局長

2年ぶり、日本大使館に清水武則大使を訪問、旧知の善隣協会のため、ポイントを得たモンゴル情勢を伺うことができた。ウランバートル市のオクトンバガナ教育局長を訪問し、教育問題、市政問題に花が咲いた。植樹で直接お世話になったバイヤルマグナイ建設部門担当官も同席した。こういう方たちを日本に招くことも重要だと感じた。中国の駐モンゴル大使館中国文化センター長のハスバゲン参事官を訪問した。おなじみ国際善隣学院卒業生である。そのオフィスは、中心地チンギスハン広場を直下に見下ろす一等地ビルのワンフロアを、相当の高額

で借り、会議室、図書室やイベントコーナーなどを備えるものであった。

なお、モンゴルに延長滞在の八島・村瀬両名は、在モンゴルJICAの佐藤睦所長、沢田博美次長から興味深い現地情報を拝聴した。少ない人口に比し、モンゴルへの日本からの援助は多く、JICA事務所人員も多い。

3、抑留者慰霊碑

首都近郊ダンバダルジャー丘陵に広がる緑の斜面にある。焼香し手を合わせた。



ダンバダルジャー慰霊公園

善隣会館6FにカシミアアパレルのS社が入居している。縁で善隣一行はカシミア通である。バスを現地最大のショップに立ち寄ってもらった。混むレジは、某国人の割り込みにイライラしたりしたが良い土産となった。

4、モンゴル総選挙

前月のモンゴル総選挙での政権交代、柱と頼む鉱物資源の不況、対外債務の返済期到来の苦境など、「大変です」を度々耳にしたモンゴル滞在であった。協会に度々お見えになるナショナルインベストメントバンクのバイラ会長が新政権の国家開発庁長官に選任されたニュースを、帰国後に聞き、日本政府との協力を推し進めるものと期待している。

ロシア編

牛木久雄（会員）

1、モンゴルからロシアへの鉄道旅行

8月2日、ウランバートル発16時22分のモスクワ行きNo.5国際列車に乗り込んだ。入構している列車に、プラットホームなしの線路脇から直接乗り込む方式である。列車は、気動車2輦が引く9輦編成だった。

客車付きの女性車掌2人によ

る検札後、4人1組の2段ベッド式コンパートメント（客室）に案内された。我々の客車は気動車に続く先頭車で、我が旅行団は車掌室隣の2号室と3号室を占有した。同じ車両には韓国人やドイツ人のグループも乗り込んでいて、客室は全部で9室、即ち36人乗りだった。乗車口脇にトイレ、その向かいには給湯器があつて、お茶やインスタント食品の準備に重宝した。

ロシアと中国をつなぐモンゴル縦断の鉄道は、モンゴル・ソ連合弁のウランバートル鉄道公社（1949年設立）が1951年に建設し開業した。ウランバートル鉄道公社は、その後モンゴル鉄道会社となった。この鉄道は、中国へはザミンウードから内蒙古の二連浩特（エレンホト）を経て北京へ向かい、ロシアへはスフバートルからナウシキ、ウランウデを経てシベリア鉄道に連絡する。モンゴル鉄道の軌道幅はシベリア鉄道と同じ1520mmだが、中国では標準軌1435mmなので、国境で

車台を入れ換えねばならない。乗り込むと直ぐに発車となったが、エアコンが効かなかったため、高温多湿で一同ぐったりしてしまった。

しかし、車窓からの風景は格別だった。夕闇迫るモンゴル草原、雄大なセレンゲ河、シベリア・タイガ（森林）、そしてバイカル湖と次々に我々の目を楽しませてくれた。残念ながら、翌日は雨天だったので、バイカル湖を遠くまで望むことはできなかったが、列車は南岸を延々と走って、湖岸の景色を堪能させてくれた。

ロシアに入ると鉄道は電化さ



リストビヤンカ日本人墓地

れ、シベリア鉄道本線は複線であった。長大なコンテナ列車とすれ違うことも頻繁になり、予想以上の活気を目の当たりにした。

8月3日16時10分、イルクーツク駅に着いた。

2、イルクーツクとバイカル湖畔のリストビヤンカ日本人墓地

出迎えたガイドは、日本育ちのロシア青年で、普段は弁護士をしている秀才だった。人口60万人の州都イルクーツクは、バイカル湖からの清流アンガラ河が貫流し、街には教会や聖堂が黄金の塔頂を輝かせていた。

町からタイガのハイウェイを1時間東進すると、バイカル湖畔のリストビヤンカに着く。ここはバイカル観光の中心で、外国人のツアー客も大勢来っていた。日本人墓地は町外れの山腹にあり、60人の抑留者が眠っていた。墓地は木立に包まれ、地元



イルクーツク公現祭教会

があり、その落ち着いた佇まいは、既にソ連が崩壊して四半世紀であることを示していた。イルクーツクは、路面電車が走る古い町並みと、夜景のきれいな新ショッピング街が、共に賑わう魅力的な町である。

アンガラ河沿いの公園や市内の広場には、帝政時代のシベリア総督やコサックの勇者、革命内戦時代の白衛軍コルチャック将軍やソビエト指導者レーニンの立像などが据えられ、激動の歴史に思いを馳せさせる。

市内の其処ここに、ヨーロツ

パの大型スーパーや、今風の洒落たカフェ、レストランがある一方で、老舗の書店が次々と姿を消しているというのも、この町が大きな変化を遂げつつあることを示しているのだろう。

3、ウラジオストク

8月4日の夜中1時にイルクーツクを離陸し、夜明けのハバロフスクに着陸した。ここで飛行機を乗り換え、5日の朝9時過ぎに新装のウラジオストク空港に着いた。出迎えてくれたガイドは身長190cmを越す瘦身の若者だった。大学では日本文学を専攻し2年前に卒業したそうである。

中心市街への途上、アルチョムの日本人死亡者慰霊公園を訪ねた。田舎道とシベリア鉄道に挟まれた50mプール位の小さな慰霊公園は、丁度石畳の工事中心だった。記念の石碑が3本立っていたが、そのうちの1本が酷く破損していた。

ウラジオストクはソビエト太平洋艦隊の本拠地だったため、

かつて冷戦時代には西側旅行者の入域が禁じられていた。ところが、市内に着いて直ぐ案内された「鷲ノ巣」展望台の眼下に、艦船が並ぶ軍港を一望した時は、少なからず驚いた。しかも写真は撮り放題で、直ぐ目の先には「黄金橋」が金角湾を跨ぎ、その更に南にはルスキー島への新しい橋も見渡せた。

ウラジオストクの人口は60万人だが、ロシア沿海地方の中心都市として大きな開発が進められている。2012年9月のAPEC（アジア太平洋経済協力）



ウラジオストク港

首脳会議はルスキー島で開催されたが、この時に建設された会議場は、極東連邦大学DVFUの新キャンパスとなっている。

現在、学生数は4万人といわれ、訪問した8月6日は夏休み中の土曜日だったが、校内のビーチに來た海水浴客や、極真館空手大会の参加者などで広大なキャンパスは賑わっていた。

ウラジオストクは、空港、港湾、鉄道など大型インフラの整備が進み、高速道路の建設や、空港への高速鉄道の開設等、開発へ向けての動きも顕著である。しかし、どこか停滞しているような印象もあった。恐らく、その一因は日本との国交回復の遅れにあるのだろう。

豊かな自然と、独特の地形、重厚な歴史背景など、ウラジオストクの発展に寄与する地域的要素は多い。今年末に向かって、日本とロシアは懸案解決のために動き始めているが、今回のツアーで得た知見をもとに、我々も現地に対する認識を更に深める必要がある。